

なぜ日本画に心惹かれたか*

ドリス・ドラッカー

正気を取り戻し、世界への視野を正す

夫ピーターがマネジメントの父とされていることはご存じと思う。だが、他方で彼は日本画の学徒であり、収集家でもあった。

出会いは1933年のロンドンだった。勤務先からの帰宅途中大雨に遭い、ふと目にとまった通り脇に雨宿りした。偶然にもここは繁華街で知られるピカデリーの一角バーリントン通りで、まさにその建物でロンドン最初の日本画展が開催されていた。

展示をめぐり歩くうちに、いつしか心はわしづかみにされていた。いころだった。以来、彼は博物館や展示会に足繁く通っては、いっそうの日本画鑑賞に努めた。戦時中ワシントンにいたときにも、時間の許す限り日本画の所蔵で有名なフリーアというギャラリーを訪れていた。

1960年の日本訪問に際し、彼はどこにでもいる鑑賞者から、熱心な収集家になっていった。私に関わることになったのは、1961年に彼と行動をともにしてからだった。爾来、夫婦ともに日本の掛け物を熱心に継続的に購入し続けている。

わけても夫にとって、日本画の鑑賞とは単に異文化体験にとどまらず、人生において必要欠くべからざるものとなっていた。「正気を取り戻し、世界への視野を正すために、日本画を見る」と言っていた。

私たち西洋の者にとって幸いなことに、日本人の特質とは知覚にあり、知覚は見ることを基本とする感官の働きである。私たちも目を見開くことを学ぶことによって、知覚が開発されたり、日本画をいかに鑑賞すべきかを知るといって実に大きな見返りを得ることができた。

ただし、これは残念なことであるけれども、私たちは本当の意味で日本画に込められた意味のすべてを汲むことはできない。詩という芸術とは、絵画的想像力が統覚されたものである。したがって、詩的言語を知らずして、さらにい

えば日本語を知らず、署名や印字を解せずして、真の意味で日本画を知的射程に収めたとはいいがたい。同時に、作品そのものが訴えるもののかかなりの部分を逸することとなる。

とはいえ、日本画の収集とは心躍る体験だった。画商を訪れ次々に素敵な作品を見せてもらい、「これは本当に必要な。コレクションに加える価値あるものか。買える値段か」などと頭を悩ませたことを今では懐かしく思い出す。

静謐なる情報を求める

夫はものを見るにあたり、動くものを避けていた。テレビやビデオなど観なかったし、パソコンに触れたこともなかった。無理に連れ出す場合を除けば映画にも行かなかった。それも年に1度か2度行けばいいほうだった。

デジタル情報というものを信頼していなかった。グーグルが正しい回答を示すなど信じていかなかった。それは『ブリタニカ百科事典』にのみなしうることだった。彼にとっての「情報」とは、きちんとした形で紙上に印刷されたものでなければならなかった。

しかし、情報とはすべからく変転するものであり、常時伝送される信号にはかならない。そしてそれは今に始まったことでも何でもなく、宇宙の始源にまで遡ることができる。人は情報技術革命や情報の時代を声高に叫ぶ。あたかもわれわれが自らの手でそれを発明したかのようだ。私たちがすべて手ずからやったことだなんて、見当違いもはなはだしいというものである。それ自体を偉業とするなどとてもない。

あるとすれば、情報へのアクセスの開発である。確かに、情報へのアクセスは考えられないほどに容易で便利なものになった。

今日情報は溢れている。いつ果てるとも知れぬデジタル・データの氾濫である。そこにはかそけきものなど存在しない。4分の1とか3分の1とかはない。あるのは0か1のいずれかである。ひどいことには、考えられない速さで情報は浸透していく。速くなればなるほどに、時間あたりに押しつけられる量は激増していく。さらに、貪婪な欲望もつれてくる。

これが幼年時代から現代人が直面する現実である。習慣的な暴飲暴食は肥満と怠惰を招く。同様のことが情報にも起きている。無思慮な情報の摂取は人を精神的な肥満と怠惰に導く。

夫を数少ない例外とすれば、そのような危機に注意を払う者はなかった。意識的か無意識的か、彼は動かざる情報が閉め出されるとき、人類が何を失うかを理解していた。絵画を観ることで受けるメッセージがまさにその動かざる情報であった。

そのような情報とはマスメディアから強要されるものではない。自らの精神的、文化的価値を涵養するためにこそ、自らのリズムで、自ら探し求めるま

* 本稿は2006年11月13日に国際文化会館(六本木)で行われたレセプションでの講演用に書き下ろされたものである。

に受け取るものである。自らの手で見出すべきものである。そこに醍醐味がある。

それらの作品は日本文化から出て、寺社や遺跡、美術館や公私で所蔵された。私ども夫妻にかけがえのない作品を見出させてくださった「先生方」に、尽きることなき感謝を送りたいと思う。

曇りなき清明な世界

夫は日本史も研究していた。各時代の歴史的・政治的状況が画風にいかなる力を及ぼしたかを深く理解するためだった。一例として、1339年の足利将軍家による京都から鎌倉への遷都により、室町特有の画風が形成されたのがそれにあたろう。その後も各時代は独特の画風を持つことになる。

私はどうかと言えば、歴史をさほど重視したわけでもなかった。純粋に日本画が好きだった。今まで見たことのない感興をもたらしてくれたし、自然やそれを超えたものが絶え間なく響鳴する世界がそこにあったからだ。どの作品を見ても、そこには曇りなき清明さがあった。完璧な技法が駆使されることで、こころを慈しむ思いが全面に表れていた。水墨画では手元に一点の狂いもあってはならない。元には戻らない。

私たち夫妻の趣味がほぼ完全に一致したのは喜ぶべきことだった。水墨画といっても、装飾的で技巧に優れた江戸時代の狩野派の作品よりも、室町・桃山時代に展開された五山時代の禅画にわけても心惹かれた。購入する作品についても夫妻で意見が分かれることはほとんどなかった。まれに意見の不一致があったとしても、だいたいどこかで折り合った。

そんなとき、彼はこんなふうに言っていた。「わかった。そこまでいうのだったら、買うことにしよう。実際おもしろい画風だと思う。でもね、この作品は君の部屋に飾ってくれよ。くれぐれも僕の目には入らないように」

収集していてよかったの思うのは、他のいろんな日本画愛好家や収集家に会えたことだ。なかでも飛び抜けていたのは、ビル・クラークさんだった。カリフォルニア州ハンフォードにある日本画と日本文化の財団を設立し、要職にある方である。

この美術館は一見に値する。私などはよくサンフランシスコやロスアンジェルスを訪ねるみなさんに、ちょっと寄り道して、はっと息を呑むような日本画のコレクションをご覧になるようお勧めしている。

絵画のみではなく、同時代の陶磁器、竹細工なども展示されている。蛇足ながら、クラークさんがピーターの名を冠する奨学金を創設されたことを嬉しく思う。これは日本の研究者や学徒を一定期間招聘し、批評のための教育・研究を支援するものである。

この奨学金制度はマネジメントの発展に貢献した夫に加え、日本画への心か

らの賛意を持つ者としての彼の遺産を継承するものとして、また小なりといえども存命中だけでなく未来世代にその果実を分け与えるものとして、多大の意義を持つものである。

井坂康志訳